脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.3

 **提出書類**

**緊急事態対応を含む脱施設化に関するガイドライン案に関する意見書**

**（国連障害者権利委員会宛て）**

**提出者**

"知的な困難を抱える"男性

**サポート**

**スロベニア共和国社会保護研究所**

[Validity Foundation –精神障害者人権擁護センター](https://validity.ngo/)

2022年6月３０日

　私は 「知的な困難を抱える」男性です。母親と一緒に地域で暮らしています。

**ガイドライン（わかりやすい版）を読んで**

**《主な意見》**

　全体として、この文書はよく書かれています。けれども、社会が私たちを表現するときに使う用語が好きではありません。スロベニア語の障害者という言葉（「無効者」）は良くないし、間違っています。代わりに、「特別なニーズを持つ人」を使うべきです("ljudje s posebnimi potrebami")。

**《施設について》**

　私たちの団体（organisation）も全体的な施設（total institutions）だとしたら、「施設」について述べたいことがあります。まず私は混乱しました。うちの団体は全体的な施設のいくつかの要素をもっており、団体は共同作業を私にさせています。しかし私は地域で、施設の外の仕事を探したいのです。

**《ガイドラインに沿うこと》**

　私たち利用者は、団体の職員と同じ権利を持つべきです。職員にできることは、利用者もできるようにすべきです。(例えば、施設にいる間、スタッフが携帯電話を充電できるのであれば、利用者に対して禁止すべきではないでしょう）

私たちの団体では、いくつかのルールがあり、それは差別的で隔離的なものでした。

私は団体で働く職員と対等でなければなりません。だから、セルフアドボカシーグループは、利用者にとっても重要なのです。物事を変える力になります。それが私たちの最善の利益です。

**《あるグループに対する不当な扱い》**

女性は本当に別の立場に置かれています。暴力は許容すべきではないと付け加えたいです。誰も無作法な話し方をすることや、入退室時に挨拶しないことは許されません。

ガイドラインに書かれている暴力とは何かについて、誰もが理解できるようにもっと説明するべきだと思います。

　人は家族と一緒に家にいるべきです。私が高校生の時、学校での態度が悪くて、親にここに入れられました。私は何も分りませんでした。私は一人で暮らしたかったのですが、今は母が面倒を見てくれています。今はそれがいいですが。

注：この投稿で示された意見はインタビューされた一個人のものであり、必ずしも、その当事者が協議プロセスに参加することを可能にしたヴァリディティ（Validity）財団の意見を反映したものではありません。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（訳　2023年4月： 尾上裕亮、岡本 明、佐藤久夫）